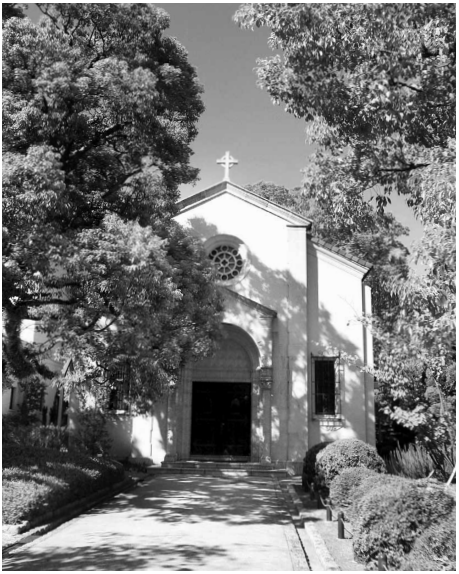
チャペル週報

そこではもはや、ユダヤ人もギリシア人もなく、
奴隷も自由な身分の者もなく、
男も女もありません。あなたがたは皆、
キリスト・イエスにおいて一つだからです。

（ガラテヤの信徒への手紙3:28）



秋季宗教運動特集号
2010.10.11～10.15　No.18
関西学院宗教センター

☆チャペル・スケジュール☆

時間 10:35～11:05　　場所 各学部チャペル

10月11日(月)
神　平　田　智　夢（神4）
経　徳　田　真　二（キャンパス自立支援課長）
人　English Chapel　Andreas Rusterholz（文学部宗教主事）
短大　聖書物語「ナアマン将軍」

10月12日(火)
神　岩　野　祐　介（神学部助教）
文　永　田　雄次郎（文学部教授）
社　「瀬戸内国際芸術祭」を訪れて　社会学部学生有志
法　上ケ原ハビタット
商　音楽チャペル　聖歌隊
国　上ケ原ハビタットによるチャペル
教　森　田　雅　也（文学部教授）
総　山　田　孝　子（総合政策学部教授）

10月13日(水)
神　キリスト教音楽に触れよう１ 水　野　隆　一（神学部教授）
社　いのちを考える④ 打　樋　啓　史（宗教主事）
法　伊　藤　照　子（メリノールシスター）
経　上ケ原ハビタット活動報告
商　梅　咲　敦　子（商学部教授）
人　エルス・マリー　アンベッケン（人間福祉学部教授）
教　片　桐　亜　以（幼4）「短大と大学と手話と私」
理　「進路変更」松　木　真　一（宗教主事）
総　柴　山　　太（総合政策学部教授）

10月14日(木)
大学合同チャペル（西宮上ケ原）10:20～11:20
「困難を共に担い、希望をしっかり語り、協働する」
井　口　　泰（経済学部教授）
於：中央講堂
大学合同チャペル（西宮聖和）10:20～11:20
「ネパールの人々と共に」
ウルミラ・ライ、ミンクマリ・タマン、坂西卓郎（PHD協会）
於：メアリー・イザベラ・ランバスチャペル
大学合同チャペル（神戸三田）10:20～11:20
「何事にも時がある」大　津　恵　子（日本キリスト教婦人矯風会理事、女性の家HELP運営委員）
於：Ⅵ号館101号教室
短大　ウルミラ・ライ、ミンクマリ・タマン、坂西卓郎（PHD協会）
「ネパールの人々と共に 」

10月15日(金)
大学合同チャペル（西宮上ケ原）10:20～11:20
「何事にも時がある」大　津　恵　子（日本キリスト教婦人矯風会理事、女性の家HELP運営委員）
於：中央講堂
大学合同チャペル（西宮聖和）10:20～11:20
「困難を共に担い、希望をしっかり語り、協働する」
井　口　　泰（経済学部教授）
於：メアリー・イザベラ・ランバスチャペル
大学合同チャペル（神戸三田）10:20～11:20
「ボーダーを越えて」
村　瀬　義　史（総合政策学部専任講師・宗教主事）
於：Ⅵ号館101号教室

◇ランバス早天祈祷会　毎金曜日　午前8:20～8:40　於：ランバス記念礼拝堂(上ケ原)
10月14日(木)宗教運動のために　Els-Marie Anbäcken
10月15日(金)商学部のために　小　菅　正　伸

困難を共に担い、希望をしっかり語り、協働する
－世界経済危機後の東アジアの将来－

井　口　　泰

経済のグローバリゼーションは、多文化主義的（multicultural）な社会をもたらすと、自然に信じることができた時代がありました。しかし現在では、欧米のみならず、世界各地で多文化主義への反動（backlash）の嵐が吹き荒れています。

東アジアでも、2010年１月からASEAN（東南アジア諸国連合）と日本、中国及び韓国の間で、自由貿易協定が本格的に稼働し始めました。ところが、この地域には、1950年代の朝鮮戦争終結以後、冷戦構造が存在し、大規模な米軍が駐留し、国境紛争が存在します。近年、中国が経済的のみならず、軍事的にも力を増すなか、この地域での日本の立場はますます微妙なものになってきました。

ちょうど20年前、欧州では東西ドイツが統一し、その後、ソ連邦が崩壊して冷戦が終結し、経済統合は政治統合の段階に進みました。ところが、東アジアでは、各国ナショナリズムが強く、リージョナリズムを圧倒する勢いです。そこには、経済統合と安全保障の間に深刻なねじれがあります。国と国との対立が、国民同士の対立に反映する土壌では、多文化主義が根付いても、一瞬に崩壊しかねません。

2008年９月に発生した世界経済危機で欧米諸国は深く傷つき、成長のダイナミズムを失いました。これに対し、東アジアでは、中国の高度成長が域内の貿易や投資を誘発し、域内諸国の経済は急回復を遂げました。しかし日本経済は、デフレーションと人口減少の重荷を背負い、円高の重圧を受けて苦しんでいます。今世紀にはいり、雇用の不安定化や世帯所得の低下が続き、これを背景に、家族のきずなが希薄化し、個人は孤立しやすくなっています。

教育現場でも、「格差社会」とか「滑り台社会」といった用語が流布し、中高生たちも、勉強しないと社会の底辺に落ちるぞという強迫感を与えられています。これでは、自由な感情や意見を表明する環境は失われます。学校に疑問を感じ、不登校や不就学になった子どもたちに対し、教員は十分なケアをする余裕がありません。大学に進学した若者の多くは、自分をリスクから守る行動様式はあっても、未知の世界に打ってでる勇気は失われつつあります。

大企業のみならず、中小企業の多くは、危機後の世界経済の変化についていけません。日本企業は、長年、欧米市場に狙いを定め、アジアを生産拠点と位置付けてきました。危機を境目に、縮小する国内市場に依存せず、新興国市場を中心とする世界市場を目標とした経営に転換しなければ、雇用さえ維持できなくなります。しかし、これに必要な外国人材の確保も定着もままならない状況が存在します。

このように、日本をとりまく情勢は非常に厳しく、安易な夢は語れないのです。そこで、ペトロの手紙Ⅰ（特に２章11～17節、３章13～17節）のみことば

から聴きたいと思います。この手紙は、使徒ペトロの死後に完成され、ローマ帝国による迫害を示唆する記述があり、小アジア半島に離散したキリスト者に宛てたものです。迫害の危険を背負った彼らが、異教徒のなかで少数者として共生するための勧告が書かれています。即ち、多文化の社会でこそ、人々のためになり、思いやり深く、立派な行いをなし、心にいだく希望をしっかり説明することが勧められています。

これからの私たちには、多文化がぶつかり合う世界に出て生きる力が必要です。大事なのは、国の軍事力や政治力を背景とした威嚇ではありません。周囲の人々を思いやり、困難を共に担い、希望をしっかり語り、協働する道です。東アジアの冷戦構造をいつの日か廃止し、周辺諸国民と真の和解と協力を実現するという希望をしっかり語るべきです。希望を語り、困難に耐え、危機を乗り越え、草の根の努力を積み重ねることが大事なのです。

（経済学部教授）

PHD運動の原点
－岩村昇医師のネパールでの活動から－

坂　西　卓　郎

PHD協会を設立した岩村医師は幼少期に洗礼を受け、広島での被爆体験の後に医師になることを志しました。そして、医師となった岩村ドクターは1962年、日本からネパールへと旅立ちました。「ネパールにいる病気の人を助けたい」岩村ドクターはこの願いを胸に、山の間にあるタンセンという町の病院で働くことになりました。当時、ネパールには病院は少なく、大勢の人が病院にやってきました。その中には遠方の方も多くいました。岩村ドクターは毎日疲れ果てるまで診察を行いました。

しかし、そんなある日、こう思ったそうです。「病院に来ることができるのは元気な病人だけだ」と。ネパールは山が多く、車が通れる道も少ない。だから、ほとんどの人は自分の足で歩いてくるか、家族に背負われて来ていました。岩村ドクターは、病院に来られない人たちのことを思いました。そして、「こちらから出かけていこう」と決めました。

薬や道具を背負って、遠くにある村をひとつひとつまわりながら病院に来ることのできない重い病気の人の診察を始め、健康の相談にも応じました。ある村にいくと、一人のおばあさんが重い病気で寝ていました。このまま家に居てはおばあさんだけでなく、家族みんなに病気が伝染してしまう。ドクターは、そのおばあさんを病院に連れて帰って重い病気を治したいと思いました。ところが季節は夏、畑の仕事が忙しい時期です。自分では歩けないおばあさんは、誰かにおんぶしてもらわなければ病院への移動の手段がありません。ですが、家族は農作業から離れるわけにはいきません。ドクターたちも自分の荷物がたくさんあります。岩村ドクターは困ってしまい、神様にお祈りしました。「神様、

おばあさんを病院に連れて行きたいのです。どうか助けてください。」と。

次の日のことです。一人の若者が村に荷物を届けにやってきました。この人は荷物を運ぶのが仕事です。そこで、ドクターはその若者におばあさんを病院まで運んでくれるように頼みました。若者は喜んで、この仕事を引き受けてくれました。若者がおばあさんを背負い、みんなで病院をめざしました。いくつもの山を越え、谷を下りました。そして３日目に、やっと病院のあるタンセンの町に着いたのです。

ドクターは感謝の念をこめて、３日分のお金を差し出しました。ところが、若者は受け取ろうとしません。若者は言いました。「僕は若くて、力もあります。でも、このおばあさんは年をとって元気がありません。だから３日分だけ、僕の元気をおばあさんに分けました。お金のために運んだのではありません。おばあさんを運んだことで、徳を積むことができました。運ばせてくださったドクター岩村に感謝します。」岩村ドクターが「どうしてそこまで親切にしてくれるんだい？」と聞くと若者は「サンガイ・ジウナコ・ラギ（みんなで生きるためだよ）」と答えました。そして若者は帰って行きました。若者は裸足で、服も破れていました。このお金があれば、新しいくつや服が買えたのに。

「生きることは分かち合い」これがPHD運動の原点です。PHD協会は2011年度で設立30周年を迎えますが、この岩村ドクターの願いを実現すべく、「生きることは分かち合い」を胸に、毎年アジアから研修生を招いています。自分のためではなく、村のみんなのために有機農業や保健衛生を日本で学び、村に帰ってからは地域のリーダーとして活躍しています。2010年度はネパールから2名、インドネシアから1名を招いています。設立から30年が経過し、岩村ドクターのことを知る人も少なくなってきましたが、岩村ドクターの想いを継続させるためにも、ぜひPHD運動へのご理解とご協力をお願いします。

（PHD協会職員）

出典「サンガイ　ジウナコ　ラギ（みんなで生きるために）」文・岩村史子（日本キリスト教団出版局）

コヘレトの言葉　３章１－11
「何事にも時がある」

大　津　恵　子

現在「豊かな日本」に来る移住労働者数は221万人で、総人口の1.74％にあたります。また、国際結婚は1980年代後半から急増し、2007年には、17組に一組が国際結婚のカップルです。そのうち夫が日本人で、妻が外国籍の場合がおおよそ８割を占めています。

最近若い人たちが人身売買や配偶者からの暴力（DV）について、私から話を聞きたいと言われます。「なぜ人身売買の問題に関心を持つようになったのか」

と問われます。初めて人身売買の被害者と出会ったのは、1991年、私がタイから帰国してすぐでした。当時京都ＹＷＣＡが外国人の電話相談APT（Asian People Together）を 開設し、その相談員として活動を始めた時でした。あるタイ人女性が、大阪のカットリックの施設で保護されました。彼女は、日本での仕事が売春と知らず、あこがれの地に働きに来ました。日本に来たとたんに彼女には莫大な借金が課せられ、それを返すまで自由になれないと、スナックのママに言われました。彼女が私に「日本に来て人間らしい扱いを受けなかった。私は人間です。」と言った言葉を聞いて、それ以来私は、外国籍の人たちの支援をするようになりました。なぜ女性たちは日本に来なければならなかったのか？この問いの答えを探すために今まで活動を続けてきたように思います。

1999年から「女性の家HELP」のディレクターとして、人身売買の被害者や夫からの暴力で避難してくる女性と子どもの支援をしました。日本人と結婚した外国籍女性たちは、言葉が出来ないために弱い立場に置かれます。情報が女性たちに届きません。DV防止法の制定に力を注ぎ、語ることが出来ない当事者の代わりに私は代弁者になりました。活動して20年になり、最近特に疲れが出てきました。「歳だから」とあきらめ的に行動を狭めている私がおり、出来るだけしんどいことはしたくないと考えてしまう私がいました。

その時です。NHKの番組で「ハイチのマザーテレサ」と呼ばれているカトリックのシスター須藤昭子さんが取り上げられました。ハイチは先般の地震で国そのものが壊滅状態になりました。83歳の医師であるシスターは、衛生環境が悪く、沢山の人たちが結核に冒されているハイチに病院を作り結核患者の治療に奔走されました。この国の復興を考え農業学校を建設するため資金集めのためにシスターが帰国中にハイチの地震が起こったのです。病院も農業学校の建設予定地もことごとくなくなり瓦礫の街を歩かれるシスターの目の前にいるのは被災者の人たちでした。年老いたシスターが人々の間を歩いている姿が映し出されました。司会者が年も年なので引退を考えられるのではと問うとシスターは、「これは職業でなく、生き方の問題です」とはっきりと言われました。私は、この言葉を聞いたときに喝を入れられたと思いました。当然シスターと比べることなどできない私ですが、シスターに力を与えているのは、神への信仰と一言では言えないものを感じました。

聖書を見ますと「何事にも時がある」（コヘレトの言葉３章１節）「神はすべてを時宜にかなうように作り、また永遠を思う心を人に与えられる」（３章11節）とあります。私は、さまざまな経験を通して知るのは、神様がその時その時を備えて下さったと思います。若い人たちは今しかできない時があるからこそ「その時を大切に生きよ」と言っておられるように思います。今まで多くの人たちとの出会いがありました。傷ついた女性たちに出会い共に泣いたこともありますが、一緒に笑った経験もしました。外国籍女性のたくましさを教えてももらいました。

これから私のすることは、私を必要とする人たちと共に歩みたいと思います。また若い人たちへ私がしてきた経験を共有していきたいと思います。

（日本キリスト教婦人矯風会理事、女性の家 HELP 運営委員）

ボーダーを越えて

村　瀬　義　史

あるテレビ番組で、お笑いコンビ「南海キャンディーズ」の山里亮太さん（山ちゃん）の一番嫌いな言葉が「人による」という言葉だと聞いて思わずニヤリと笑ってしまった。彼がこの言葉を嫌がる理由を正確には知らない。しかし、「人による」という言葉が、物事のとらえ方に多様な立場があるのを認める言葉でありながら、その言葉を語る本人は事柄から距離を置いて外側から見ているような言葉に聞こえたからだ。自分がしばしばそういう「外」の場に逃れることを山ちゃんに指摘されたように感じたからニヤリとしたのだと思う。

マスコミやインターネットなどの通信技術のおかげで、私たちは国内外で起こっている出来事について――たとえば貧困、戦争、テロ、虐待、人権侵害、自然環境破壊、不正など――多くの情報を得ることができる。しかし、どれほど私たち自身が関わっているリアルな「地続き」の事柄として捉えているだろうか。もちろん、全世界のあらゆる事柄に対して主体的に関わり続けることはできない。しかし、私たちはこの世界の「外」に完全に出てしまうことはできない。たまたま日本は海に囲まれているが、「世界」とは海の外にある「むこうの世界」のことではないのだ。

学生時代のことだが、インドで開かれた小さな国際会議に参加した時、アジア諸国から集った他の参加者が「平和」をめぐって激しく議論する姿に圧倒されていると、議長が話を止めて私の名を呼び、「聞いてばかりいないで、何を考えているか言ってくれ。議論に入って来てくれ」と言われ、それでも結局まともに議論に入って行けなかった思い出がある。あの時の感触は今も覚えている。私たちがこの世界を誰かと一緒に生きる場として過ごしてゆくためには、「人による。いろんな立場があるんだなあ」と一歩引いて見ているだけ、というわけにはいかない。もう一歩踏み込んでいかねばならないことを教えられた体験だった。

国と同じく、人と人の間には見える形・見えない形で様々な境界線（ボーダー）があって、それを越えつつ一緒に生きるというのは必ずしも簡単なことではない。私たちの間にある様々な「違い」は、一人ひとりが固有の存在であるゆえの素晴らしいものでありながら、しばしばその「違い」が隔てや敵意の壁を生む。自分と異なる価値観にさらされる、それぞれの「正しさ」がひしめき合う場に入っていくと、自分の中にある思考の枠組みや価値観が問われ、自分が揺さぶられるのでつい防衛的・攻撃的になってしまうものだ。しかし、様々な形のボーダーを越えた出会いの場にこそ、豊かな発見と成長の可能性が秘められていることを思わずにはおれない。

環境や経済や人の流れなどについて「ボーダーレス」とか「グローバル」と形容されるこの世界において、人と人の間に横たわる様々なボーダーを丁寧に理解していくことが大切ではないだろうか。そのうえで、私たちが、至るところひび割れのあるこの価値多元的な世界に対して肯定的に関わり、よりよい世界の形成に参加している自分であり続けるために何ができるだろうか。外国語が話せるとか、広い教養があるとか、「国境」という意味でのボーダーを越えて海外に行くことも極めて大切であるが、同時に、世界のどこにいても自分とは異なる者の存在を喜び、歓迎できる心のあり方を求め続けたいものである。ここで「世界市民として生きる」という今回の主題とスクールモットー “Mastery for Service” がつながってくるのではないだろうか。

（総合政策学部宗教主事）

●ランバスチャペルアワー

学部の枠を超えて集まった学生主体のチャペルがランバスチャペルアワーです。秋学期の予定は以下のとおりです。

10月26日（火）
11月30日（火）

いずれもランバス記念礼拝堂（西宮上ケ原キャンパス）にて10：35～11：05

●大阪梅田キャンパスチャペル

阪急梅田駅から徒歩すぐ、アプローズタワー14階の大阪梅田キャンパスでは、授業期間中の毎週金曜日にチャペルアワーを開催しています。
（18：00～18：20　1405教室）

10月15日（金）田淵　結　（教育学部宗教主事、宗教総主事）
10月22日（金）A.ルスターホルツ　（文学部宗教主事）
10月29日（金）樋口　進　（宗教センター宗教主事）

●関西学院会館の日曜礼拝

授業期間中の第２・第４日曜日に教職員と学生有志による礼拝が行われます。一部英語を用いる形式です。どなたでも参加できますのでどうぞお越しください。

10月24日（日）　午前10時～11時
関西学院会館ベーツチャペル

●ＣＤ・ＤＶＤライブラリー

吉岡記念館事務室宗教センターには、教会音楽、キリスト教に関するＣＤやＤＶＤを備えています。本学学生及び教職員（学生証または身分証明書必要）であればどなたでも利用できますので、希望者は事務室までお越しください。

●使用済み切手収集にご協力ください

本学では日本キリスト教海外医療協力会（JOCS）切手部の活動に協力し、使用済み切手の収集をしています。通常切手も対象としていますのでどうぞ吉岡記念館常設の回収箱にお届けください。

●盲導犬育成のためご協力お願いします

関西学院宗教活動委員会は、目の不自由な方々の社会参加促進を願い、社会福祉法人「日本ライトハウス」の募金活動に協力しています。吉岡記念館事務室はじめ募金箱を用意しておりますので皆様の温かいご協力をお願いいたします。